

ジャック・ヴァシェとジャン・サルマンの 共作短編集「レ・ソラネル」について

後 藤 美和子

1. 序

近年、ジャック・ヴァシェとジャン・サルマンの共作短編集「レ・ソラネル〔仰々しい人々〕」が、ヴァシェの詩、デッサン、その他の短編〔コント〕やサルマンの対話劇と併せ、『レ・ソラネル』の書名でディレクタ社から出版された¹。短編集「レ・ソラネル」は四作品から成り、そのうちの三作品にはヴァシェの筆名であるトリスタン・イラルとサルマンの名が揃って記されていたが、彼らがいっどのように共作したかという作品の成り立ちについては、同書の序文²も含め、これまで論じられたことがないと思われる。アンドレ・ブルトンとフィリップ・スーポーの『磁場』〔1920年刊〕のように、あるいはナント・グループにおける「一体詩」のように、ヴァシェとサルマンが一つの作品を二人〔複数〕で分け持ったのだろうか。この疑問に答えるため、本稿著者は2014年9月にナント市立図書館メディアテック・ジャック・ドゥミの郷土歴史資料室において、同館に保管されている「レ・ソラネル」の草稿を閲覧した。本論考はこの草稿調査に基づき、「レ・ソラネル」の制作過程を明らかにしようとするものである。さらに、ヴァシェ、サルマン、友人ウジェーヌ・ユブレの手紙とサルマンの自伝的作品を精読することで、「レ・ソラネル」の制作時期とヴァシェにおける作品制作と発表への意志について考察する。

2. サールたちの略歴とジャン・サルマンの遺贈品について

ジャック・ヴァシェ（1895-1919）は1895年9月7日にブルターニュ地方のロリアンで生まれた。職業軍人である父の赴任先のインドシナで幼少期を過ごした後、ナント高校〔現クレマンソー高校〕に転入学した彼は、ジャン・サルマン（1897-1976）、ウジェーヌ・ユブレ（1896-1916）、ピエール・ビセリエ（1896-1929 (?)）らと親しくなり、ともに文学グループを作る。サルマンの自伝的小説『カヴァルカドゥール』³（1977）によれば、このグループは人々を上からミーム、サール、人間、下人間、上人間、下士官、将軍の順に階層化し、サール・ペラダン⁴の名に由来する「サール」という高位の階級に自分たちを分類していた。彼らは高校の第四学年〔最終学年〕在学中の1913年2月に「さあ行こう、悪集団よ」誌〔1号のみ〕を、1913年秋から1914年初頭にかけて「野鴨」誌〔1号~4号〕を刊行する。バカロレアを取得後、ヴァシェは1913年秋にナント市内のエコール・デ・ボザール〔美術学校〕に進学したが、1914年8月1日にフランスで総動員令が出ると、同年12月15日に動員される。

1 Jacques Vaché et Jean Sarment, *Les Solennels*, Dilecta, 2007

2 Patrice Allain, « Introduction, Jacques Vaché, l'Œuvre au négatif », *Ibid.*, pp. 9-29

3 Jean Sarment, *Cavalcadour*, Jean-Claude Simoën, 1977

4 本名はジョゼファン・ペラダン（1858-1918）。神秘思想家。

ユブレは故郷のショレで、「野鴨」誌時代の未発表作品やその後の新しい作品を雑誌の形にまとめる努力を続け、1915年3月28日に「サールたちの言ったこと」と題する三番目の雑誌を、自分のタイプライターを使って三冊だけ完成させる。彼はその約二週間後の4月10日に動員され、翌年10月27日にソンムの戦場で二十歳で戦死した。

サルマンは第一の雑誌「さあ行こう、悪集団よ」に反軍国主義的な劇評を載せたために、高校を停学処分になる。同誌に「アナルシー〔アナーキー〕」と題する記事を書き、サルマンと同時に停学処分を受けた友人ピエール・リヴォーが1960年代に家族のために記した回想記⁵には、サルマンはその際に自主退学し、個人の資格でバカロレアを取得したとある。サルマンは1915年にパリのコンセルヴァトワール〔国立高等演劇学校〕に入学し、1916年9月にオデオン座と契約する。そして、1917年11月にジャック・コポーのヴィユ・コロンビエ座とともにニューヨークに渡り、1919年7月まで滞在した。彼は第一次世界大戦に動員されず、1919年1月6日にヴァシェが死んだ時もニューヨークにいたことになる。サルマンが1960年に書いた「私」と「思い出」との自伝的対話劇「思い出と腕を組み」には、「私は1917年春に彼〔ヴァシェ〕と最後に会った」⁶とあり、ヴァシェがオデオン座の楽屋でサルマンを待ちながら、劇場のレターヘッドのついた紙に舞台メイク用の鉛筆でボードレールとバルザックの絵を描いたことが語られている。実際これらの絵は後述するサルマンの遺贈品に含まれており、そこには17年2月21日の日付が入っている。1920年にはリュニエ＝ポーがサルマンの戯曲『紙の王冠』を制作座の新劇場のこけら落としとして舞台にかけ、サルマンは新進の戯作家、俳優として注目を浴びた⁷。サルマン作の『ハムレットの結婚』(1923)、『影を釣る人』(1926)はすでに1920年代に日本語に翻訳されている⁸。

ジャック・ヴァシェの書いた詩と短編小説の草稿、デッサン、手紙の多くはナント市立図書館メディアテック・ジャック・ドゥミ〔以下メディアテックと略す〕の郷土歴史資料室に保管されている。ジャン・サルマンの死後、娘のジャクリーヌ・サルマンが父親サルマンの蔵書、草稿、書簡、写真、出生証明書等の個人的な証書類を、彼の生まれ故郷であるナント市の図書館に寄贈したのだが、それらの資料の中に、サルマンがヴァシェ、ユブレ、ビセリエたちから受け取った手紙や、この友人たちが書いた詩や短編小説の原稿も含まれていた。ジャクリーヌ・サルマンは『ジャン・サルマン、シュルレアリスム黎明期における書簡集』(2004年刊)の序文に、「1994年に私は〈ナントとシュルレアリスム展〉を準備していたナント図書館とナント美術館の双方から頼まれて、父がうやうやしく保存していた〈サールたち〉のグループのシュルレアリスムの冒険を物語る原稿やデッサン類を貸与しました。若き日の原稿類をどうすべきか、父は私にはっきりとは述べていませんでしたが、私はそれらをインスピレーションの源である土地〔ナント〕に永久に戻すべきだと考えました。そこで、私はそれらをナント市に寄贈することにしました。今後、それらが市立図書館で閲覧されることを望みます」⁹と書いている。演劇人として活躍したサルマンであるが、ジャクリーヌ・サルマンが「うやうやしく」

5 « Extraits des mémoires de Pierre Riveau, alias Ursus », in Jean Sarment, *correspondances à l'aube du surréalisme, La nouvelle revue nantaise*, numéro 4, 2004, pp. 38-41

6 Jean Sarment, « Au bras du souvenir », in *Les Solennels*, op. cit., pp. 106-107

7 本庄桂輔『フランス近代劇史』(新潮社, 1969年刊), pp. 281-287, pp. 202-204

8 『ハムレットの結婚』(前川堅市訳)と『影を釣る人』(高橋邦太郎訳)は『世界戯曲全集』第35巻(近代社, 1928年刊)に、『紙の王冠』(川口篤訳)は『現代世界戯曲集』第8巻(白水社, 1954年刊)に所収。

9 Jacqueline Sarment, « Préface », in Jean Sarment, *correspondances à l'aube du surréalisme*, op. cit., p. 11

と形容した通り、彼にとって若き日の仲間たちとの活動はとりわけ大切な思い出であり、『ナントのジャン・ジャック』(1922)、『フロリモンの芳名帳』(1948)、『カヴァルカドゥール』(1977)などの自伝的小説、「私の若き日の三人の友人ウジェーヌ・ユブレ、ピエール・ビセリエ、ジャック・ヴァシェの思い出に」という献辞のついた「我々は三人だった」(1951)や「思い出と腕を組み」(1960)といった戯曲を生む原動力となった。

3. 「レ・ソラネル」の草稿

「レ・ソラネル」は未発表のまま、草稿はメディアテックのサルマンの遺贈品の中に眠っていたが、2007年になってディレクタ社から出版された。「レ・ソラネル」は「とても良い青年」、「不良のポール・ポワール」、「動員だ」、「ジル」の四つの短編を集めたコント集である¹⁰。メディアテックには、「不良のポール・ポワール」と「動員だ」の草稿が二種類ずつ存在する。本論考では、修正の跡を多くとどめ、より初期のものと思われるものを第一草稿、それらを清書したとみられるものを第二草稿と呼ぶことにする。「とても良い青年」と「ジル」については、清書版とみられる一種類の草稿のみが見つかっており、本論考ではそれも第二草稿と呼ぶ。第二草稿は四作品の本文の他に表紙と扉を伴い、本の模型のような形を呈している。

まず、第一草稿についてだが、「不良のポール・ポワール」の筆跡はサルマンのものである。全部で5枚あり、黒インクが使われている。5枚目の最後にジャン・サルマンのサインが、サルマン特有の右上がりの筆跡で書かれている。その左下にヴァシェの筆名であるトリスタン・イラルのサインがあるが、これもサルマンの筆跡と思われ、インクも同色である。誤りを鉛筆で訂正した跡¹¹があるが、その鉛筆書きの筆跡はヴァシェのものと似ている。この箇所は、ヴァシェの筆跡による第二草稿では、初めから正しく書かれている。反対に、サルマンによる第一草稿で正しく書かれていた箇所を、ヴァシェが第二草稿で書き間違え、黒ペンで訂正した跡¹²もある。「動員だ」については、筆跡はヴァシェのもので、青インクが使われている。計5枚あるが、1枚目は上から半分程の所で水平に破かれ、下半分がなくなっているため、読めなくなった行がある。「とても良い青年」の第一草稿と比べて、書き直し、削除、書き加えが多く、作者のサインは書かれていない。

第二草稿は「とても良い青年」、「不良のポール・ポワール」、「動員だ」、「ジル」を清書し、表紙と扉をつけたものであるが、その全てがヴァシェの筆跡である。使用された用紙はサイズが横9.5センチ×縦16センチで、小さな升目が印刷されており、手帳あるいはノートから剥ぎ取られた形跡がある。子細に見てみると、上部から四分の一の高さに赤罫線が印刷されているものとそうでないものの二種類があることに気づく。「動員だ」の第一草稿でヴァシェが使ったのは、この赤罫線のある方と同じ用紙であり、「とても良い青年」の第一草稿でサルマンが使ったのは、いずれとも異なる用紙だった。第二草稿の表紙は赤罫線のある用紙が使われ、右上にやや大きな字で「レ・ソラネル」という総題が、その下には最初の収録作品の題「とても良い青年」が書かれている。また、右下には収録された四作品の題が、左下にはT. H-S. とイニシャルが記されている。T. Hはトリスタン・イラル

10 本論考の末尾に、付記として四作品のあらすじを載せた。

11 「大人たち (les grandes personnes)」を誤って男性複数の代名詞 ils で受けた箇所を、鉛筆で女性複数 elles に訂正している。

12 動詞 échangeaient を échangeait, 副詞 vraiment を vraiment と書いた後、訂正している。

を、Sはサルマンを示すと考えられる。第二草稿は表紙を入れて計22枚あり、本論考では表紙を1とし、1～22の通し番号を振ることにする。

2～5は「とても良い青年」である。赤罫線のない用紙と黒インクが使われ、用紙には四つ折りした跡が残っている。清書後にいくつかの文字を黒インクで消しており、数行まとめて移動させる鉛筆書きの指示もある。5の最後には、トリスタン・イラル、サルマン、そしてレ・ソラネルの文字がカッコつきで記されている。6は赤罫線の入った用紙で、「不良のポール・ポワール」のタイトルが青インクで書かれている。7～10は「不良のポール・ポワール」の本文で、赤罫線のない用紙に黒インクで清書されている。9の三行に大きく鉛筆でバツがついているが、そのバツの印を取り消そうとする鉛筆の跡があり、欄外には鉛筆で「もとに戻す」と書かれている。ヴァシェはサルマンの第一草稿を元にして第二草稿を作った後、それに手を加えるか否かで躊躇しているようである。5と同様、10の最後にトリスタン・イラル、サルマン、レ・ソラネルの文字がカッコつきで書かれている。

11～18は赤罫線のある用紙と青インクが使われており、11は「動員だ」の文字だけが赤罫線のすぐ上に書かれている。12～18は「動員だ」の本文である。12の右上に「レ・ソラネル、コント」の文字があり、赤罫線の上には「動員だ…」とタイトルが書かれているが、このタイトルに鉛筆で斜線が引かれ、同じく鉛筆で「ある戦争」と訂正されている。11の扉に書かれたタイトルにこの訂正は反映されていないため、第二草稿全編を通していくつか見られる鉛筆での訂正あるいは逡巡の跡は、最後になされたものと考えられる。また、18の最終行に書かれた「動員だ、お分かりですか？」の一文は第一草稿にはなかったものである。サインはトリスタン・イラルを表す「T.H.」だけで、サルマンの名はない。サインの下には14年11月2日と書かれている。

19～22は赤罫線のある用紙と青インクが使われ、19には「ジル」のタイトルが書かれている。20～22は「ジル」の本文であるが、20の右上には12と同様に青インクで「レ・ソラネル、コント」と書かれ、22の末尾にはT.H-Sのサインと、1913年11月21日の日付がある。「ジル」はすでに「野鴨」誌第四号に発表されており、掲載頁にも13年11月21日の日付が印刷されていた。目次には「ジル」ではなく「散文」と印刷され、作者としてトリスタン・イラルの名だけが載っていた。一方、本文頁ではタイトルは「ジル（コント）」となっており、ヴァシェあるいは「野鴨」誌編集に携わったメンバーが、こうした短い散文作品を「コント」と呼称していたことが分かる。

4. 「レ・ソラネル」の第二草稿〔清書版〕の成立

前章で見た1から22は、使われた用紙とインク、書式から、次のAとBに分けることができる。Aブロックは「とても良い青年」の本文と「不良のポール・ポワール」の本文であり、Bブロックは表紙、「動員だ」の本文、「ジル」の本文、「不良のポール・ポワール」、「ジル」、「動員だ」のそれぞれの扉である。Aの二作品それぞれの最終頁に「レ・ソラネル」と書き込まれていることから、この二作品を清書する際、すでにヴァシェにはこれらをコント集「レ・ソラネル」としてまとめる構想があったことが分かる。前述の通り、「動員だ」以外の三作品はトリスタン・イラルとジャン・サルマンの連名の署名が作品ごとに記されている。しかしながら、「不良のポール・ポワール」の第一草稿がサルマン一人の筆跡であること、「動員だ」の第一草稿がヴァシェ一人の筆跡であること、さらに、「ジル」が「野鴨」誌にヴァシェ一人の名で発表されていたことから、「レ・ソラネル」は、例えばブルトンとスーポーの『磁場』のように一作品を二人で共同執筆したものではなく、「不良の

ポール・ポワール」はサルマン、「動員だ」と「ジル」はヴァシェが書き、互いに持ち寄ったのではないかと推測される。「とても良い青年」については資料が乏しいが、サルマンの筆跡の第一草稿を持つ「不良のポール・ポワール」の第二草稿と書式が同じであり、同時期に清書されたと考えられることから、サルマンの作と仮定する。前述の通り、「動員だ」の第一草稿はBブロックのものと同じ用紙、インクが使われていた。したがって、第二草稿の成立の順序としては、ヴァシェは「動員だ」の第一草稿を書いた後、すぐに「動員だ」の清書〔B〕と旧作「ジル」の清書〔B〕を行い、それらとは別に本文の清書ができていた「とても良い青年」〔A〕と「不良のポール・ポワール」〔A〕のうちの後者のための扉〔B〕と「動員だ」、「ジル」の二つの扉〔B〕、そして表紙〔B〕を作り、AとBを合わせて一冊の本の形に整えたのではないだろうか。

5. 「レ・ソラネル」の清書時期

「動員だ」は、「悲劇的な白い小さなポスターが、戦わなければいけないこと、たくさんの死が絶対に必要となったことを告げた時、〈ナントの製粉工場〉のピショワ・ルロン夫妻は何か分からないものが胃の窪みを押すのを感じた¹³」という文章で始まる。したがって、ヴァシェが「動員だ」の第一草稿を書き始めたのは、フランスに総動員令が出た1914年8月1日以降である。前述の通り、「動員だ」の第二草稿には1914年11月2日の日付があり、ヴァシェがブレストで動員されたのは12月15日である。したがって、ヴァシェはコント集「レ・ソラネル」の第二草稿のうち、Bブロックの作成を1914年11月2日以降にスタートさせ、限られた時間の中でAと合わせた一冊の本の形に仕上げ、それをサルマンの手に委ねて出征していったと考えられる。サールたちの手紙や雑誌を手がかりに、この年のヴァシェとサルマンの動きをさらに詳しく見ていくことにする。

サルマン、ヴァシェ、ユブレ、ビセリエたちの第二の雑誌「野鴨」は第四号をもって終刊した。「野鴨」誌はいずれの号にも発行日が印刷されていないため、刊行の正確な日付は分からないが、第四号掲載の記事につけられた日付のうち、最も遅いものは1914年1月6日である。また、1914年5月29日付のユブレからサルマンへの手紙¹⁴には「野鴨は死んだ」という言葉があり、「野鴨」誌の予約購読者たちに宛てたタイプ打ちの終刊の挨拶文が同封されている。したがって第四号の刊行は、1914年1月6日から5月29日の間である。

第三の雑誌「サールたちの言ったこと」誌は「調和のある儀礼に従い」、「率直に、率直に」、「ある日…」から成る三部作である。第一部のうち制作時期が分かるのは、1913年6・7月と記された冒頭の詩だけであり、「野鴨」誌1号の準備期と時期が重なっている。「サールたちの言ったこと」の第一部には、これ以外にも「野鴨」誌の時代に書かれた未発表作品が収められているかもしれない。第二部のうち少なくとも日付のある四作品は、「野鴨」終刊後に書かれた新作である。「動員25日目」、「動員27日目」という書き方と「1914年8月26日」、「1914年8月28日」という記述が混ざっているが、総動員令の出た8月1日をもとに、翌8月2日を動員一日目と数えるため、動員25日目とは1914年8月26日、動員27日目とは1914年8月28日のことである。第三部の序文には1915年3月28日という日付がある。これはユブレが「サールたちの言ったこと」誌のタイプ印刷を終えるにあ

13 Jacques Vaché et Jean Sarment, *Les Solennels*, op. cit., p. 63

14 Jean Sarment, *correspondances à l'aube du surréalisme*, op. cit., pp. 61-63

たり、最終頁に「サール・エドガー・リュック〔ユブレの筆名〕により、1915年3月28日に印刷終了」と記した日付と同じである。さらに、詩篇「サールたちが酒に酔った日」には「1914年10月23日トラントムー」¹⁵ という記載があり、戯曲「ユーモアの死」には1915年2月18日の日付がある。

ここで、「サールたちが酒に酔った日」と「動員だ」に記された日付の近さ〔1914年10月23日と1914年11月2日〕に注目したい。1914年10月14日付の手紙に、ユブレはサルマンに宛てて次のように書いている。

ヴァシェが企画している大饗宴にはぜひ行きたい。物の分かった者たち、本当にその名に値するサールやミームのみんなと再会するのは楽しみだし、僕たちの良き過去を懐かしむのもいいだろう。ヴァシェにそう伝えてくれ、彼は僕には返事をよこさないから¹⁶。〔下線強調は本稿著者による〕

これに続くユブレからサルマンへの手紙は、1914年11月10日付の次のものである。

手紙を書くのが遅れたことをあまり責めないでくれ、仕方がなかったのだ。僕を見送りに来たサールたち、ミームたち、下人間たちからもう話に聞いただけだろうが、いろいろ波乱があった後、僕は四時半にナントを出て、九時丁度に、ここ〔ショレの町〕に無事到着した。〔中略〕君とともに過ごした二週間は暖かい思い出になるだろうし、喜びのないこの先の日々を生きていく助けとなるだろう¹⁷。

文面から、この11月10日付の手紙はユブレがナントからショレに帰った後、すぐに書かれたものではないことが分かる。そこに五日間の遅れを仮定するなら、彼がショレに戻ったのは11月5日となり、「二週間」と手紙に書かれたナント滞在期間は10月21日から11月5日までとなる。すると、詩篇「サールたちが酒に酔った日」に記された10月23日という日付も、「動員だ」第二草稿に付された11月2日も、両方ともその期間中に収まることになる。

この時期のヴァシェについて、ミシェル・カラスーは『ジャック・ヴァシェとナント・グループ』の中で、ヴァシェは1914年の夏から動員までイギリスにいたと書いているが¹⁸、これまでの資料から、別の可能性が見えてくる。総動員令が出た8月にヴァシェがヴァカンスでイギリスにいたとしても、ユブレの手紙の通り「大饗宴」の企画者がヴァシェであったなら、ヴァシェは10月後半にはすでにナントに戻っており、サルマンやユブレたちとともに大饗宴に参加したのではないだろうか。この大饗宴は、詩篇「サールたちが酒に酔った日」が書かれた10月23日のトラントムーでの集会と同じものかもしれず、もしそうなら、後述する「一体詩」の実験にヴァシェも参加したことになる。また、ヴァシェがサルマンとの再会を機に、二人の共作「レ・ソラネル」を完成させた可能性もある。「レ・ソラネル」の原稿がサルマンの遺贈品の中から見つかった以上、それはどこかでヴァシェからサルマンへと渡ったはずであるが、この受け渡しの詳細は不明である。郵送の証拠となるような封筒や手紙は、メディアテックに残されていない。

15 トラントムーはロワール川をはさんでナントの対岸に位置する小さな町である。

16 *Jean Sarment, correspondances à l'aube du surréalisme, op. cit.*, pp. 68-69

17 *Ibid.*, pp. 70-71

18 Michel Carassou, *Jacques Vaché et le groupe de Nantes*, Jean-Michel Place, 1986, p. 140

6. 原稿の行方

ヴァシェが自分の作品のいくつか、あるいは全てを意図的にサルマンに預けたことは、次に引用するヴァシェからサルマンへの1915年8月21日付の手紙¹⁹を読むと明らかである。この手紙は「死体の塹壕」と呼ばれるロレーヌ地方の激戦地に向かう直前に戦場で書かれたもので、遺書のような意味を持っている。

いずれにせよ、小競り合いが終わったら、僕は君に手紙を書く——あるいは誰かが書くだろうよ——僕がそこに居続けることになったら、君に預けておいたものを選別して欲しい——焼きたいものはそうしてくれ——君に任せる——僕がするのと同じことを、君がやってくれると分かっているから。²⁰

同手紙に「君だけには、僕の親愛なるジャンよ、物が分かっているほとんど唯一の人物である君に隠し事をしないために、僕は、まずいことになっていると伝えなくてはならない」とあるように、ヴァシェはサルマンたちの中でもサルマンを最も信頼しており、だからこそサルマンに自分の原稿を預けたのだろう。この手紙の冒頭は次のようなものだった。

嫌なニュースを伝えなくてはならない。僕たちが立てた素晴らしい計画は、無関心という働きを持つ偶然の力によって、全て台無しになりそうだ——僕は今晚、この大戦における最もばかげた場所に向けて出発する。²¹

「僕たちが立てた素晴らしい計画」というのが「レ・ソラネル」の出版計画であるなら、ヴァシェは動員された後も作品の発表を諦めていなかったことになる。激戦地に向けて出発する当日、死を覚悟して書いた手紙の宛先が他ならぬサルマンであり、二人が企てた計画と、自らが戦死した後の原稿の整理についてがそこに書かれていたことから、ヴァシェが自分の作品制作と発表にどれほど重きを置いていたかが分かる。

ヴァシェはこの年の9月25日にマルヌ県タウールの地で、榴弾の爆発によって左足の太もも、ふくらはぎ、踝を負傷し、初めはヌヴェールの病院に、続いて家族のいるナントに移され、ポカージュ通り二番地の臨時病院²²に入院した。ナントの病院からヴァシェがサルマンに宛てた手紙は、1915年11月22日付のものと同日付不明のものがメディアアテックに残されており、ヴァシェは後者の中で次のように書いている。

他者への失望というすでに容認された感情が、次第に僕の中にこびりつく。彼らが僕を驚かせることはめったにない。僕はそのことで彼らに感謝する。ボードレールの粋な射撃家が、上手く射ったことを「優美で呪うべき愛人」に感謝するように。僕は不明瞭な散文を書いているが、それでもそれは、少女たちが惨めなピアノで弾くアルペジオが役に立つのと同様に役に立つ。それ以下だが。それから僕は、かなりたくさん絵も描いている。才能があると自惚れているわけではないが、この点ではとても上達したと言える。僕に教

19 封筒の消印は8月25日。宛先はサルマンのナントの自宅〔ストラスブル通り十九番地〕であり、宛名はサルマンの本名ジャン・ベルメールとなっている。

20 *Jean Sarmant, correspondances à l'aube du surréalisme, op. cit., pp. 96-97*

21 *Ibid.*

22 ナント女子高校〔現ギストー高校〕を戦時中に病院としたもの。

えるだけのセンスと腕のある人物がいなかったことが、とても残念だ！ 僕の反故類を送ってくれたかい？
もう送ったのなら、全く届いてない。もしもまだなら、今の住所で受け取ることができれば有難い。²³

前に引用した8月21日付のサルマン宛の手紙の中で、兵士の七割が死ぬであろう激戦を小競り合いと表現したように、ヴァシェはしばしば大事を些末事として語る。したがって、この手紙に「僕の反故類」と書かれているものも、文字通りの書き損じではなく、ヴァシェがサルマンに預けた原稿類のことではないだろうか。病院からの11月22日付の手紙で、ヴァシェは後方勤務兵の身分で入院を続けることを伝えており²⁴、前線を離れたことを機に原稿の返却をサルマンに求めたものと考えられる。この要求に対し、サルマンがどう応じたのかは不明である。「レ・ソラネル」の原稿を始め、今日メディアテックにある資料はサルマンが保管していたものであり、ヴァシェの要求に応じてサルマンが手離したがために、失われてしまった原稿もあるのかもしれない。

また、病院から出された先の手紙を読むと、当時ヴァシェが散文を書いていたことが分かる。散文とは「レ・ソラネル」に収められたようなコントだったかもしれない。あるいは、ボードレールの散文詩「粋な射撃家」〔『パリの憂鬱』〕が手紙の中で正確に引用されていることから、入院中のヴァシェが『パリの憂鬱』を手元においていた可能性もあり、手紙に「不明瞭な散文」と記されているものが「散文詩」であったことも考えられる。アンドレ・ブルトンがヴァシェと出会ったのは、サルマン宛のこの二通の手紙が書かれたのと同じ時期、同じ場所においてである。しかし、ブルトンが「侮蔑的告白」で「〈全てのことに對しほとんど意味を認めない〉という芸術の大家」²⁵として当時のヴァシェを語ったのに対し、サルマンの手紙からは、いまだ絵を描き、散文を書き続けるヴァシェの姿が浮かび上がってくる。

7. サルマンが語ること

サルマンはヴァシェのコント制作について、対話劇「思い出と腕を組み」と自伝的小説『カヴァルカドゥール』の作中でわずかに触れるのみである。「思い出と腕を組み」において、「私」は対話者である「思い出」に対し、「我々はともに高校の四学年〔最終学年〕に在籍していた——ジャック・ヴァシェは小さなコント、通常短くて無遠慮で不敬なクロッキー風人物描写、そして少しはかなげな詩を書いていた」²⁶と語る。この台詞はヴァシェのコントの特徴を捉えているが、サルマンが高校の最終学年にいたのは1912年秋から1913年2月までであり、「ジル」〔1913年11月21日〕、「動員だ」〔1914年11月2日〕、「貧しい親戚の女」²⁷〔1913年11月14日〕、詩篇「私の人生は長く続く腐敗だ」〔1914年2月7日〕が書かれたのはそれよりも後である。また、『カヴァルカドゥール』の「万歳！万歳！万歳！パイプを吸おう」の章には、「ブヴィエ＝ジャック・ドール〔ヴァシェがモデル〕は破産した上流階級の人々や、不良のブルジョワ子息や、〈勝手な下男〉についての少しとげとげしい素描を提供した」²⁸

23 Jean Sarment, *correspondances à l'aube du surréalisme*, op. cit., p. 98

24 *Ibid.*, p. 97

25 André Breton, « La Confession dédaigneuse », in *Œuvres complètes I*, p. 199, Gallimard, 1988.

26 Jean Sarment, « Au bras du souvenir », op. cit., p. 101

27 「貧しい親戚の女」はヴァシェによるコント。同じくヴァシェによる詩篇「私の人生は長く続く腐敗だ」とともに、2007年刊『レ・ソラネル』に所収。

28 Jean Sarment, *Cavalcadour*, op. cit., p. 446

という描写がある。これは「不良のポール・ポワール」と「ジル」の筋を思わせるが、先に見た通り、「不良のポール・ポワール」はサルマンの作と考えられる。「レ・ソラネル」の共作としての意図に従い、サルマンは二人の作者を一人に圧縮してしまったかのようである。

サールたちが再会した1914年10月から11月の時期について、サルマンは『カヴァルカドゥール』の中でどのように描いているのだろうか。問題になるのは「万歳！万歳！万歳！パイプを吸おう」²⁹と「夢の灰」³⁰の二つの章である。「万歳！万歳！万歳！パイプを吸おう」の章はナントのサン・マリー通りのアルボンヌ〔ユブレ〕の家における、「野鴨」誌第三号の編集会議の様子を描いている。アルボンヌ、語り手〔サルマン〕、ブヴィエ〔ヴァシェ〕、ピランジュー〔ビセリエ〕が出席しており、ブヴィエは主に英語を使っている。編集会議が終わる頃、グループの中心人物アルボンヌが「さあ、少し息抜きをしよう。〈一体詩〉を始めよう」と言う。「そして、彼らは始める。それぞれ一行ずつ書くのだ。もしもインスピレーションの衝動が命ずるならば二行を」と作中で説明されるように、一体詩とは、参加者が一、二行ずつ交替で書き連ねていく集団詩の試みであったようだ。ここには次のような実例が示されている。

アルボンヌ：僕は心を持っていた、僕は魂を持っていた
ブヴィエ：僕の祝婚歌を聞いてくれ
アルボンヌ：僕の心は行ってしまった／貿易風の中を
パトリス：僕は僕の魂を方々に探した

しかしながら、実例とされたこの詩句は、「サールたちの言ったこと」誌第三部に「1914年10月23日トラントムー」の記載とともに収録された詩篇「サールたちが酒に酔った日」の一部である。サルマンはこの詩篇が書かれたいきさつを、1913年秋の「野鴨」誌第三号の編集会議の思い出の中にまとめてしまい、そのエピソードの一つとして語っているのだ。

次に「夢の灰」の章についてであるが、主人公パトリス〔サルマンがモデル〕は5月18日にパリに向けて出発することが決まり、次に引用するように、友人たちによる送別会が開かれる。

これはサールたちの最後の集会であり、パトリスへの別れだった〔中略〕。彼らはトラントムーのビストロ二階の、色の褪せた木の手すりのテラス席に座り、斑状に草の茂った土手と河と対岸を見下ろしていた。³¹

作中ではこの別れの会に、ブヴィエ、パトリス、アルボンヌ、ピランジューの四人が集まっている。こうしたサルマンへの送別会は実際にあったのだろうか。ユブレからサルマンに宛てた手紙の中で1914年5月18日に日付が最も近いものとしては、5月29日付の手紙がある。これによれば、ショレに住むユブレは4月29日頃ナントに行き、「サールやミームたちの全て」と再会するが、サルマンにだけは会えなかった。「到着するや、君が二週間前にパリに向けて出発したと告げられた」とユブレは書いている³²。手紙と共にメディアテックに保管されている封筒の住所と消印を頼りに、当時のサルマンの居場所を調べたところ、ユブレは1914年4月22日付の手紙をサルマンのナントの自宅宛に

29 *Ibid.*, pp. 441-449

30 *Ibid.*, pp. 535-538

31 *Ibid.*, p. 536

32 *Jean Sarmant, correspondances à l'aube du surréalisme, op. cit.*, pp. 60-63

出しているが、手紙はパリの郵便局へと転送されており、すでにその時期、サルマンがパリに着いていたことが分かる。その後、ユブレの手紙はサルマンが滞在するパリのホテルに宛てて出されるようになるが、1914年9月1日付の手紙から、再び宛先はサルマンのナントの自宅となる。続く1914年10月14日、11月10日の手紙も同じくナントの自宅に宛てて出されていることから、前述の「大饗宴」と詩篇「サールたちが酒に酔った日」が書かれたトラントムーでの集会は、サルマンのナントへの帰省中に開かれたと考えられる。

『カヴァルカドゥール』に描かれる5月18日が1914年のことであるなら、故郷ナントを離れるパトリスの姿が、演劇での成功を求めてパリに向かうサルマンと重なるが、5月29日付及び12月31日付³³のユブレの手紙にある通り、実際はサルマンはユブレに告げずにナントを発っており、彼のための送別会は開かれていない。それでは、1年後の1915年の5月はどうかという、1915年3月22日付のサルマン宛のユブレの手紙はパリの住所に出されており、文面にも「君はパリに戻ったんだね」³⁴とある。また、1915年5月にはヴァシェとユブレはすでに第一次世界大戦に動員されており、ナントでの再会は考えにくい。ユブレが最初の任地ル・ブランからサルマンに宛てた1915年5月28日付の手紙³⁵にも、5月に友人たちが再会したことを示す記述はない。

『カヴァルカドゥール』には「あとがきに代えて」³⁶と題する章があり、そこにサルマンは『カヴァルカドゥール』の登場人物たち全ての実名を列挙するのは、退屈で慎みのないことかもしれないが、一体詩とサールの作品の創造者である〈ミームたち〉の真の姿をどうしても知ってほしいのだ。〔中略〕ジャック・ブヴィエはジャック・ヴァシェである。この見者にアンドレ・ブルトンに魅了され、1919年に『戦場の手紙』の序文を書いたのであるが、ヴァシェは現行の道徳的・芸術的価値を拒絶し、数少ない著作によって20世紀最大の知的運動の基礎を築いた。」と書き、作中人物とモデルを繋いでいる。しかしながら、『カヴァルカドゥール』の各エピソード中で、事実は変容しつつ分散し、他の時代の出来事やフィクションと思われるものの中に混線してしまう。

最後に「夢の灰」の章の終盤についてであるが、ここでアルボンヌ〔ユブレ〕は友人たちに「本当の大饗宴をしないか？」と言う。この「大饗宴」〔orgie〕という単語は、ユブレがヴァシェの企画として手紙に記したものと同一である。しかし、作中で彼らが行ったのは、文字通りの宴会を開くことでも、「サールたちが酒に酔った日」のような一体詩をアルコールの力を借りながら書くことでもなく、次のようなストイックで感動的な別れの儀式だった。まず、アルボンヌがレストランに常備してある封筒を人数分取り、灰皿の灰を少しずつ入れて封をする。そして参加者たちが、それぞれ自分の封筒に「我々の夢の灰」と記すのである。ブヴィエ〔ヴァシェ〕だけは「みなと同じことをしないために」、鏡文字にした英語で「アッシュ・オブ・アワ・ドリームス」と書いたとある。驚くことに、ピエール・ビセリエがサルマンに送った1917年7月14日付の手紙³⁷には、「僕はあれら全てを見つけた……、包肉用紙や、黄ばんだ小さなコルネ〔円錐形の紙袋〕に丁寧に入れられた僕たちの夢の灰

33 *Ibid.*, p. 71. 1914年12月31日付のサルマン宛のユブレの手紙には、「リヴォーから、君がコンセルヴァトワールの受験のためにパリに行ったと聞いた。友情を込めて、僕は君の合格を祈った。君は不合格を知らせてきた」とある。

34 *Ibid.*, pp. 74-75

35 *Ibid.*, pp. 78-80

36 Jean Sarment, *Cavalcadour*, *op. cit.*, p. 543

37 Jean Sarment, *correspondances à l'aube du surréalisme*, *op. cit.*, pp. 115-116

を」という一節がある。思い出の品をしまった石鹸の箱やビスケットの缶の中に、「夢の灰」の入ったコルネを見出したとビセリエが報告していることから、サルマンの書く夢の灰のエピソードは全くのフィクションではないと考えられる。「夢の灰」を分け合う別れの儀式は、サールたちのおそらく最後の集会となった1914年10月から11月に行われた可能性がある。そのことと、作中で印象的に描かれるブヴィエ〔ヴァシェ〕の参加の両方を裏付けることができれば、このエピソードは、「レ・ソラネル」の清書期あるいは完成直後におけるヴァシェとサルマンの再会という仮説に、有利な資料を一つ与えることになるだろう。

8. まとめ

サルマンは対話劇「思い出と腕を組み」において、「彼〔ヴァシェ〕は我々の無邪気なサール主義に夢中で身を投じた。次のように言うのは少々気が引けるのだが、こうした言語的道化芝居が、シュルレアリスムの青春時代に名を残した一人の詩人〔ヴァシェ〕に影響を与えたのだ」³⁸と書いた。ここで「言語的道化芝居」の例として、サルマンは「サールたちの言ったこと」誌第一部の冒頭の詩を引用している。サルマンの言う「サール主義」の最も先鋭な表れは、「サールたちの言ったこと」誌第三部に収められた一体詩の試みであったと考えられるが、一体詩以外についても同誌は作者の筆名を表紙に連名で載せ、作品ごとに作者名をつけることをしなかった。複数の著者のうちの誰が書いたのかを問題にしない点で、それは「レ・ソラネル」とも共通している。本論考で見た通り、ヴァシェは動員前の限られた期間に「レ・ソラネル」の原稿を清書し、手書きの表紙と扉をつけた本の体裁にしてサルマンのもとに残した。また、激戦地に向かう直前や負傷して収容された病院においてでさえ、彼はサルマンへの手紙の中で、サルマンに預けた原稿と思われるものを気にしている。こうしたことから、ヴァシェには自分の書いた作品を発表する意志があったと推測されるが、さらに、二人の著者が別々に手掛けた四つのコントを、共作短編集「レ・ソラネル」として二人の連名でまとめようとしたヴァシェの試みは、『カヴァルカドゥール』の中でブヴィエ〔ヴァシェ〕が一体詩に共鳴し、「これは明日の詩だ」と叫んだように、ヴァシェが作者と作品との固着を乗り越えようとしていたことを示しているのではないだろうか。作品を共作し、あるいは共有し、各人は複数の偽名や匿名の中に消えていくヴァシェたちの制作と発表の在り方は、サルマンが遠慮がちにも自負した通り、シュルレアリスムに先駆けるものとして注目すべきであろう。

付記

以下、「レ・ソラネル」収録の四作品のあらすじを記す。

- ①「とても良い青年」: ジャン・ペルドリエルという名の優美なブルジョワ青年が主人公である。彼は愛国者であり、徴兵検査にも喜んで赴くが、それは自分が病弱で徴兵されないことを見越してのことだった。彼は金持ちに囲われた身分違いの娘と恋仲になるが、持参金を持つ別の女性と結婚する。そして妻を裏切りつつ、社会的に安定した生活を続けるのだった。
- ②「不良のポール・ポワール」: その名を口にするのも憚られる不良のポール・ポワールが主人公。しかし作中で彼が非難されるのは、役者になりたがったこと、芸術家ぶった髪型をしたこと、背徳的な書物を読んだこと、ミサに行かなかったことである。ポールは女性労働者と結婚し、自分で働いて月150フランを稼ぐが、そうし

38 Jean Sarment, « Au bras du souvenir », *op. cit.*, p. 103

た自由な生き方がブルジョワたちの嫌悪の的となる。

③「動員だ」：総動員を告げるビラが町に貼られる。ナントの工場主ピシヨワ・ルロンは自分の息子エルベが他の家の子どもたちとともに出征することに耐えられない。「もしも、例えばマルセル・ピローやギシェ家の息子が出征を望むとしたら、それは彼らの問題であり、また息子を行かせる狂った親たちの問題である。もしも、この若者たちが全員殺されてしまうとしたら、それもまた彼らとその親たちの意志なのではないだろうか。〔中略〕子どもたちを屠殺場（この戦争に与えるこれ以上の名があるだろうか）へ行かせるなんて、まともな人間なら理解できないことだ」とルロンは考え、息子を戦時徴用された自社工場に雇い入れることで、前線に行かなくてもすむようにする。それを知ったルロン家の召使いジュールは、自分の息子も工場に雇ってくれるように頼むが、ルロンは「国は守り手を必要としている」と言って断る。やがてギシェ家の息子は戦死し、ルロン夫人はお悔やみを言いに行く。ヴァシェはコントを次のように締めくくる。「しかし、言っておかねばなるまい。今話しているギシェ家の息子は、かの地、前線のどこかで殺されたのだ。そして、ピシヨワ・ルロン夫人はそのことを理解もせず、厚かましくもその子どもの死に涙を流しにいくのだ。そして、彼女の息子エルベは相変わらず親の工場でぬくぬくしていたのだ。動員だ、お分かりですか？」

④「ジル」：良家の召使いのジルが主人公。ジルは常に節度を持って行動し、自分の主人たちについて話す時、「我々」と言った。やがてジルの主人が、株主たちの金を横領したかどで逮捕される。ジルは主人が盗人であったことに失望する。「ジルがエプロンと、黄色と黒の縞模様のベストとともに生まれ落ちたのは、本当に残念なことだった。彼は少々頭が良く、とてもエゴイストで、さらにもっと偽善者だった。彼ならいいブルジョワになっただろうに」という文章で、ヴァシェはブルジョワとブルジョワに憧れる使用人の両方を侮蔑しているようだ。

（ごとう みわこ 総合教育センター）